

特別講演 2

「うつと女性の関係」

円山公園メンタルクリニック院長

白木 淳子 先生

近年、うつ病の患者数は増加傾向にあり、一生のうちに約 15 人に一人がうつ病を発症するといわれ、その中でも女性のうつ病有病率は男性の約 2 倍である。うつ病に関する性差として、病前性格において男性は自立型パーソナリティが多く、女性は社会依存型パーソナリティが多い。また、自殺未遂率は女性に高く、自殺既遂率は男性に高い。女性のうつ病は不安障害の併存が多いことも知られている。

女性のうつ病有病率が高いのにはホルモン分泌などの生物学的要因、社会的経済的要因、ライフイベントなどのストレス要因、対人関係や喪失体験などの精神的要因が複雑に絡み合っていると考えられる。

女性ホルモンの中樞神経系に及ぼす作用として、エストロゲンの海馬におけるアセチルコリン調整作用、抗ドーパミン作用、セロトニン神経系の働きを修復する作用や、プロゲステロンが GABA-A 受容体のアゴニストとして働く抗不安作用が挙げられる。エストロゲンレベルの大きな変化のあるときにうつを発症しやすく、女性に特徴的なうつとして、月経に関するうつ病、妊娠中のうつ病、産後うつ病、閉経後の更年期うつ病などが挙げられる。

今回の発表では月経前不快気分障害に注目し、その診断基準、薬物療法ガイドラインを紹介するとともに、自験例に基づいてエスシタロプラムによる治療効果や治療方法、症例提示を行う予定である。